

ローマ進軍とその周辺 (3)

エミリオ・ルッス 著
柴野 均 訳

第一章

ムッソリーニは11月16日に下院に、その翌日上院に初めて現れた。しかし、彼の態度と言説は下院と上院ではまったく異なるものだった。下院は彼に対して敵対的だった。したがってこれを恫喝する必要があった。上院は好意的だった。これを愛撫する必要があった。

「ドゥーチェ」はそのふたつを実に自然にやってのけた。

下院での期待は非常に大きかった。傍聴席の大半はファシスト行動隊員たちによって占められていた。議員はほぼ全員が自分の席に着いていた。彼らは憲法を尊重することにのみ希望を見出していた。競馬ファンが高い評価を与えられた血統の馬にすべてを委ねながら実際には負けかかっている、それでも奇跡を期待しているのと同じ表情が彼らの顔にはうかがえた。ジョリッティ議員は不動の姿勢で座っていた。それはガリア人の侵入を前にした元老院議員パピリウスのようなようだった。内心を知り得ない仮面を顔につけているようだった。上を見上げては長い骨ばった指で机を軽くたたいていた。

厳粛な静けさの中でその音は一種の葬送行進曲のように響いた。80歳になる老議員はイタリアの議会の葬儀が行われていることを理解していた。三人の首相経験者、サランドラ、ボノミ、ファクタもそれぞれの席に着いていた。サランドラは右派の、他のふたりは左派の席にいた。三人とも満足そうに見えた。

ニッティ議員の席は空席だった。下院議長デ・ニコラは傍聴席と穏やかな微笑みを交わしていた。

ムッソリーニは内閣のメンバーの先頭に立って勝ち誇った様子で議場に入って来た。彼は当然歩いていたが、まるで馬に乗ってでもいるような歩きぶりだった。すべての傍聴席と右派の議席からの喝采の嵐が彼を迎えた。ファシストたちは立ち上がって内戦時の歌を合唱し始めた。ムッソリーニは気をつけの姿勢をとり、くり返しローマ風敬礼を行った。

敬礼と歌が終わると政府の席の中央にムッソリーニは座った。彼の両脇にはディアズ將軍とタオン・ディ・レヴェル提督が席を占めていた。陸軍と海軍の代表である彼らは秩序の保証であり、まぎれもなく王室の支持を表現していた。ムッソリーニは下院に対して將軍と提督の列席を示した。再び喝采と歌がくり返された。ようやく最後に議長が首相に声をかけた。

あらためて拍手が爆発し、それは狂ったような熱狂ぶりだった。演説のピリオドごとに喝采は高まる一方で、まさに礼賛そのものだった。

「国王陛下が去る10月31日にルイージ・ファクタ議員より提出された辞表を受理されたことを、わたしは光栄にも下院に通告するものである。」

つつましやかな感謝のしぐさをしているファクタ議員に全員目が注がれた。

出だしは憲法にもとづく正統なものであり、すべてのことが国家の基本的な規範にしたがって行われるという印象を下院に与えようとするものだった。下院議員たちはそのことを高く評価した。

「議員諸君、今日わたしが行くことは貴君たちに対する形式的な敬意を表明する行為であって、それについて諸君からの特別な感謝のしるしを求めることはしない。」

長い中断がそれに続いた。

「議会の特権が損なわれたのであろうか？……そのことについて痛ましげに論じる仕事は絶対立憲主義の熱烈な支持者たちにまかせよう。」

右派と中道派はこの台詞を好意的に受け入れた。あちこちの議員席と傍聴席からは笑い声が長く続いた。アオスタ公妃エレナ・ディ・フランチアは上等な麻のハンカチで涙をぬぐわねばならぬほど笑った。外交団席ではポルトガルとハンガリーの大使が礼儀正しい微笑を示した。

「革命にはその固有の権利があることをわたしは主張する。さらに、誰もが知っているように、わたしがここにいるのは黒シャツの革命を防衛し最大限に力を与えるためであることもつけ加えよう。」

下院ははっきりとわかる動揺を示し、多くの議員は本能的に喝采する行動隊員でいっぱいの傍聴席を不安げに見上げた。

「敵を叩きのめすこともわたしには可能だったが、それは拒否した。」

ある種のほっとした空気が議場に流れた。議員の多くが頭を動かしてこれに同意を表明した。それはまるで武器を手にして殺してやるという乱暴者をなだめるために、脅された側が、その武器を奪うこともできず、うなずいて彼の気を落ち着かせようとするときのしぐさに似ていた。例えばこんな風である。「ええ……たしかに……だけど、そのとおりで……もちろん……それは承知している……きみが強いことは……きみにはそれくらいできるだろう……誰もそれを疑ってはいない……だけど、まさかそんなことはしないよね……」

ムッソリーニは黙り込んで威嚇的な視線をあちこちに向けた。その眼は真夜中のたいまつのようにキラキラ光っていた。

「このつんぼの冴えない議場を部隊の宿舎にしてしまうこともわたしには可能だった。議会を閉鎖してしまうこともできた。」

議長は下を向いてしまった。氷のような沈黙が議場を支配した。ブリュメール18日のボナパルトの擲弾兵たちの姿が稲妻のように人々の脳裏に浮かんだ [1799年11月10日にナポレオン配下の擲弾兵たちが議場に導入され、その圧力の下で総裁政府が倒され、ナポレオンを含む三人の執政官による三頭制が始まった]。秩序と公私にわたる平安を好む者たちの心を驚きが押しつぶした。

長い沈黙が続いた。

「わたしにはそれができた。しかし、わたしはそれを望まなかった。」

安堵のため息が議場に流れ、意気消沈した空気が広がった。議員席からは再び同意のしぐさが送られた。

「ドゥーチェ」は楽しんでいた。前足のあいだにネズミを捕まえている猫のようだった。ひと噛みでかたづけられることもできるが、優しく扱ったり、手荒に扱ったりしながら、自由になったと感じさせたと思うとまた捕まえて死の遊びに夢中になる。そんな風に「ドゥーチェ

エ」は下院を扱った。彼はその言葉に続いて、皮肉を込めて付け加えた。将来については脅迫を約束するでもなく、しないでもないものだった。

「少なくとも当面のところは。」

苦悩が議場に再び広がった。

「わたしは連合政権を作ったが、それは議会での多数を獲得するためではなかった。今ではそれがなくてもやっていくことができるからである。」

下院は戸惑っていた。

「反動の試みを最終段階で拒否した国王陛下に対して、わたしは熱い敬意を表するものである。」

「国王万歳！」傍聴席から叫び声があがり、極左派を除いて下院全体が起立した。

喝采は10分間ほど続いた。前首相ファクタでさえも拍手していた。外交団席は賛意の表明をもう抑えられなかった。結局のところ国王はたいした勇気の持ち主だったことになる。

「法にもとづく自由が傷つけられることはないであろう。いかなる犠牲を払ってでも法は尊重されるであろう……。国家は力強い存在であり、その力をすべての者に対して示すであろう。ファシストがたまたま法を犯した場合でも。」

傍聴席に詰めかけたファシスト行動隊員たちの顔に失望の表情が浮かんだ。しかし、この言葉はその見返りとして議場の中に巨大な反響を呼んだ。ジョリッティ議員さえも議会生活の中で初めてその厳かな態度を捨てて拍手を始めた。今や満足の空気は極左派の席からも伝わってきていた。

ムッソリーニの演説は国家行政について広く触れていた。経済政策、財政政策、そして何よりも外交政策について。しかし、下院はそれには関心を払わなかった。大事なものは内政だった。「命あってのものだね」というわけである。

「議員諸君、わたしは下院の意志に反して統治することを望んでいない。」

だが、曖昧な点を残さないようにムッソリーニはすぐにつけ加えた。

「それが可能な限りにおいては。」

猫は再びネズミをもてあそび始めた。演説のこの部分を「ドゥーチェ」はゆっくりと一音ずつ区切りながら、文にして述べていった。それは希望の頂点の極みに昇り、絶望の深淵に落ちて行くだけの時間を下院議員たちに与えるためだった。卒倒した者がひとりもいなかったのはまさに奇跡だった。

「しかし、二日後かあるいは二年後に解散も考えられるという特殊な立場を、下院は感じとるべきである。」

決定的な言葉が告げられた。それは取り引きの提案だった。下院はそれをすぐに理解し、磁石に引き寄せられるように、降伏がその瞬間に決定された。

「わたしは全権を要求する。」

独裁。

敵を劣等感や恐怖にとられるままにすることが不可欠である、という古典的な戦略がとられていた。そして今度は皮肉とあざけりの登場だった。冷酷にかつゆっくりと緊張が高まっていった。親指と人差し指で丸を作って額の前にかざしたムッソリーニの様子は、毒薬を抽出しようとしているかのようにだった。

「議員諸君、これ以上無意味なおしゃべりを国民に聞かせてはならない。わたしの演説について52人もの議員が論じるのはいかにも多すぎる。」

たしかにそれは多すぎた。

それがとどめの一撃だった。

しかし、それ以上言ったり行ったりすることを決めるのは彼、ムッソリーニであることをなぜ認めないのか？

クロムウェルは「長期議会」[ピューリタン革命で重要な役割を果たした議会。チャールズ一世が〈短期議会〉の失敗後の1640年に召集し、その後1660年まで続いたためにこの名がある]の解散のきっかけとなった彼の最後の演説の際に、異常なほどの平静さで話し終えると、突然怒り出したという。演壇から降りると下院議員席の真ん中まで進んで、帽子を目深にかぶり、じだんだを踏みながらこう叫んだそうだ。

「きみたちには自分たちを議会と呼ぶだけの気概があるのか？ きみたちは議会ではない。きみたちの中には大酒飲みまでいるではないか。」こう言って国王陛下のブドウ畑に入りびたりという噂のあったカロナー議員をにらみつけた。「きみたちの中には手のつけようのない女たらしもいるではないか」とこの清教徒はつけ加えた。そして彼の厳しい眼は卑小なるヘンリー・マーティンにじっと向けられた。マーティンの行動は詩人と牧神^{フオン}じみているという評判だった。「きみたちの中には福音書を辱めるようなスキャンダルを引き起こす腐敗人種がいるではないか。それでもきみたちが議会なのか！……」

クロムウェルと同様にムッソリーニも演説の最後に神の名を口にした。だが、彼はクロムウェルのような個人をあげつらう行為に訴えるのを嫌った。そして彼は狭量ではなかった。

流れの変化に敏感な下院は圧倒的な多数でムッソリーニを信任した。422人の投票のうち、賛成306、反対116、棄権7であった。この棄権の7名は何が問題とされているかを理解できず、事態がもっと明確になるのを待っていたのだった。

こうして下院は二年間命を長らえることになった。それはたいした成功だった。

ジョリッティ、ボノーミ、サランドラ、デ・ニコラは賛成票を投じた。自由民主主義グループも賛成に回った。グループの会長だった80歳になるコッコ＝オルトゥだけが反対票を投じ、その職を辞してグループを離れた。カトリック民主派も賛成した。反対票を投じたのは、アメンドラをリーダーとする民主派の小さなグループと共和派、極左派だけだった。

反ファシスト派は最終段階で予定していた反政府の立場の演説者の数を減らした。その中で最も目立ったのはダラゴーナ議員とカーオ議員だった。

ダラゴーナは労働総同盟の代表であり、社会党に属していた。カーオはわたしの小さなグループに属していた。

ダラゴーナ議員は歴史的な経緯を十分踏まえた上で、労働組合組織に対する真剣な物質的懸念を表明した。それは漂流中の水夫が靴の光沢を守ろうとするようなものだった。演説の最後に彼は和解を示唆する言葉をつけ加えた。それはまじめな発言だった。というのもその気質から彼はあらゆる種類の戦争を嫌っていたからである。カーオ議員はいくつもの論点について議論を展開した。彼は優れた弁護士で、容赦のない論告を行った。(わたしのことを示唆して)一人の同志が政府の職員によって重傷を負わされ、病院のベッドに横臥していると演説を始めた。演説の結びでは「ドゥーチェ」を攻撃しながら、全身を彼の方に伸ばして

語った。「シニョール・ムッソリーニ、抑圧不能の人民主権万歳！ 議会万歳！」演壇から降りたときの彼は怒りで震えていたため、ファシスト議員たちは「ドゥーチェ」の生命に彼が危害を加えようとするのではないかと思ったほどだった。ムッソリーニの近くにいた議員たちは急いで立ち上がり、彼を守るために丸く取り囲んだ。

読者にはここでちょっと目を閉じてもらい、この象徴的な瞬間が四年後にはどうなったかを考えてもらいたい。目を開けるとこのふたり、ダラゴーナとカーオがファシズムの中に入り込んでしまっているのを見るだろう。前者は取り澄ました親ファシストに、後者は戦闘的で非妥協的、暴力的なファシストになってしまった。両者ともにこの転向について数多くの思想的な理由と同時に実践的な動機もあげて正当化している。それはイタリアでも決して珍しいものではなく、「良心の危機」という名を持つものだった。

ムッソリーニは喜色満面で勝ち誇りながら議場を出た。それはまさに大きな見世物を終えた曲馬団の調教師のようだった。

第一二章

わたしは急速に回復しつつあったが、まだ病院のベッドにとどまらねばならなかった。傷は非常に重かった。リッシア議員はローマに戻った。平和協定を両方の陣営は尊重し、秩序は回復された。それにもかかわらず、カリアリには王国警備隊とカラビニエーレの大隊が連日到着し続けた。全員を収容するには兵舎だけでは足りなくなって、いくつかの公共の建物が彼らのために使われた。これほどの部隊の集結が何を意味するのかを友人たちから尋ねられたが、わたしにはどう答えてよいのかわからなかった。

11月27日にカリアリでファシストの大デモンストレーションが行われると新聞が報じた。そこには県のファシスト全員が参加することが予想された。細心の準備がはかられた。県知事は礼儀正しい歓迎を示すために住民に対して家々に旗を飾るように呼びかけた。ファシストの家と公共の建物を除いて、旗を飾った家は皆無だった。

ファシスト勢力がこのように集まることをカリアリの町は我慢できなかったが、なんとか敵対行為だけは抑えられた。反ファシスト派の指導者たちは、ファシストの祝典を乱すような挑発行為が起きないように目を配った。彼らはファシストの集会の前夜に秩序だったデモを行うことを求めたが、県知事はこれを禁止した。反ファシストの多くは受け身の形でファシストの見世物に立ち会うことを避けるために、その日一日を田舎で過ごそうと出かけていった。

ファシストの行動隊が27日の朝からカリアリに到着し始めた。彼らの到着を告げてラッパと太鼓の軍楽隊が町中を回った。そしてファシスト全員がファッショ支部の周辺に集まった。300人以上いた。サルデーニャでこれほど堂々としたファシストの集会が目撃されたことはなかった。カリアリの町は彼らを気にもとめなかった。

ファシストたちは棍棒とピストル、ナイフで武装していた。全員が黒シャツを着込んでいた。またそこにはサルデーニャ島では見たこともない女性ファシストの集団もいた。その数は30人ほどで、ピストルで武装し、中部イタリアの女性行動隊の制服を着ていた。彼女たちはナイフも棍棒も持っていなかったが、それは女性の優雅さがそれより高貴な武器の使用と

しか合致しなかったからだ。戦場の兵士用のそれによく似た、野営用「糧食」を彼女たちは食べていた。そして予定通り、午後一時に行進が始まった。

王国警備隊とカラビニエーレの歩兵大隊および騎兵が先導した。ファシストの鼓手たち、団旗、行動隊がそれに続いた。中央部には楽隊が入った。行列のしんがりは、先頭と同じように、カラビニエーレと王国警備兵だった。だが、行列全体でカラビニエーレの数は数十名だったのに対して、王国警備兵は千人近くもいた。本来の警察は私服姿で、隊列の両側から側面防御の任務にあたった。通りの交差点や町の重要地点は機関銃を装備した王国警備兵によって占拠されていた。祝典はうまく行きそうだった。

「祖国に対する裏切り者に死を！」隊列の先頭が叫んだ。

「死を！」その他の連中が声を合わせた。

「帽子をとれ！」リーダーが叫んだ。

住民たちは敵意をもってこれを見物していたが、動じなかった。ファシストの旗に敬意を表するため帽子を脱いだ者は誰もいなかった。ファシストたちはこの事実を重大な挑発行為と見なした。激怒した連中が隊列を離れて手に持った棍棒で見物人に襲いかかった。思いもよらない攻撃を受けた人々は身を守ろうとした。すぐに殴り合いが始まり、混乱が広がった。ファシストのリーダーのひとりが若者たちの集団に打ち負かされ、その脅迫に屈して気が狂ったように叫んだ。「くたばれムッソリーニ！」あちこちからさまざまな叫び声があがっていた。窓からの声はすべてこう叫んでいた。「くたばれファシズム！」あらゆる方面から住民たちが駆けつけてきた。ファシストのラッパは「警戒」を呼びかけた。それはあらかじめ決められていた合図だった。ファシストたちは棍棒を捨てるとナイフやピストルを引き出し、狂ったようにそれを使い始めた。流血が始まった。反対派の核となるグループが集まり、ファシストたちに対して突進した。彼らは数では上回っていたが、武装していなかった。それまでのいきさつから、彼らの中で武器を持っていた者はひとりもいなかった。

ファシストの部隊はこうしてあちこちから攻撃を受け、武器を使用したものの、あっという間に総崩れになった。すぐさま王国警備兵とカラビニエーレがファシストたちを守るために介入した。小銃を握って、砲火を開いた。最初は空に向けて発砲したが、次には群集を標的とした。むごたらしい光景が生まれた。多くの者が傷つき倒れた。逃げようとした者たちも街角に待機していた部隊に捕らえられ、逮捕された。すべてが周到に予想されていたようだった。

逮捕された者たちの抗議の声、ラッパの響き渡る音、銃声、負傷者の叫び声、女性たちの悲鳴などのせいで、カリアリの町はあたかも包囲軍の手に落ちた古代の砦のように思えた。

こうした事態が生じているあいだ、病院にいたわたしは遠くの叫び声や銃声を聞いていた。いったい何が起きているのかわからなかった。少しずつ負傷者が病院に到着し始めた。負傷者たちは担架で運ばれたり、椅子にさせられたり、友人たちに抱きかかえられてやってきた。傷の軽い者たちは自力でたどり着いた。

わたしは彼らの生々しい声によってファシストの祝典の話を知った。その後友人たちからもっと正確な情報を得た。わたしには何ができただろうか？ わたしはまだひとりでは歩けなかった。県知事に手紙を書くことに決めて、それを実行した。

平和的で非武装の住民の不意を襲った協定違反行為に対してわたしは抗議した。ファシス

トの攻撃に警察が参加したことに対する驚きを表明した。そして最後に県知事を事件の責任者としながら、彼の権能をもって事態の解決に関与すべきことを促した。

この手紙は県議会議員だったわたしの友人が直接県知事に手渡した。彼は知事の個人的な知り合いでもあった。知事は動揺を隠せない様子だった。神経質に手紙を読むとそれを折りたたんでポケットにしまい、また引き出してもう一度読んだ。

「わたしは責任者ではない」と彼は叫んだ。「なぜ私が責任をとらねばならないのだ？」

県議会議員は彼自身が目撃した事実を語った。県知事は注意深く、動揺を見せながら彼の話を聞いた。

「革命は進行中だ」県知事は苦しげにコメントした。「わたしは政府を代表している。きみだってわたしの立場に立ったとしたら……」

友人はわたしあての手紙以外には何も県知事から得ることができなかった。その手紙には愛国的な言い回しが何ヶ所かあった上で、事態の例外的な重大性をわたしが理解することを願って終わっていた。

状況は真に絶望的だった。政府の公的な介入はまったく期待できなかった。事態の例外的な重大性をわたしが理解することをわざわざ県知事に要請される必要はなかった。病院への負傷者の到着は依然として続いていた。

「俺たちが馬鹿だったんだ」とみんなが言った。「奴らは平和協定で俺たちをごまかしたんだ。すぐにも自衛体制を作る必要がある。」怒りの涙を流す者もいた。

負傷者とともにさまざまな情報が寄せられた。ファシストの部隊は再び元気を取り戻し、いったん部隊を離れた者たちも隊列に戻った。より強力な警護の下でデモンストレーションはほとんど妨害なしに進行した。

ファシストと王国警備兵たちは発砲と逮捕を続けていた。十字路に設置された機関銃が、力を誇示するように、断続的に火を噴いていた。逃げ場を求めて孤立した人々の他には道を歩く者はいなかった。しかし、建物の上からは通過する隊列に対して水や椅子、テーブルなどさまざまなものが投げつけられた。ある通りではベッドまで投げられた。かんぬきを下ろした家々からは怒りに満ちた叫び声があがった。「ひとごろし！ひとごろし！」と。

重傷者のひとりがわたしに会いたがっていると看護人から知らされた。わたしはすぐ看護人と一緒に彼のもとに急いだ。それはわたしのかつての戦友、エフィジオ・メリスだった。戦争の全期間を彼は歩兵として戦い、功労十字勲章を受けた。戦後に結婚し、工場で労働者として働いていた。彼はよく知られた反ファシストだった。彼とはしょっちゅう会っていたし、彼が好きだった。

その頃彼にはふたり目の子どもが生まれようとしていた。その前の年に最初の子どもが生まれていた。その彼が今や青ざめ動かない姿で折りたたみ式のベッドに横たわっているのだ。病院に彼を運び込んだふたりの友人が襲撃の模様をわたしに語った。彼は広場でファシストの隊列が通過する見物人たちの中にいた。片手に子どもを抱いていた彼は、他の見物人と同様に、帽子を脱がなかった。彼の居住区のファシストのひとりがナイフで二回彼の腹部を刺した。彼は勇敢な男だったが、子どもを抱いていたために自分の身を守ることができなかった。助かる見込みがない、と治療にあたった医師はわたしに告げた。

かたわらに立つと彼はわたしの手を強く握りしめた。そしてわたしをじっと見つめて、よ

うやく聞き取ることができたほど小さな声でこう言った。「戦争だ！ 戦争だ！」これが彼の最後の言葉だった。

命のきわに彼は何を言おうとしたのか？ 戦争を思い出しそれと比較していたのだろうか？ 少なくとも戦争でなら武器を手にして倒れたはずだったと。それとも政治闘争の中に生々しくよみがえった戦争の恐怖を見ていたのだろうか？

病院には五人の少年も傷ついて運び込まれた。

彼らは少年部隊の指導者たちだった。この日の午後、少年部隊は戦闘隊形を保ったまま彼らの旗を掲げて戦いに加わった。しかし、王国警備兵たちは一斉射撃で少年たちを散り散りにさせたのだった。

150人以上の負傷者が病院に現れたが、全員が反ファシスト側の人々だった。ナイフか火器による傷を全員が受けていた。重傷の者も数人いた。負傷しても逮捕を恐れて病院に現れなかった者も大勢いた。なぜならその日だけで千人以上の反対派の人々が逮捕され、負傷者のうちの数人は病院の入口で捕らえられて監獄に送られていたからだ。ファシストの側では打撲傷を負った者が十人ほどいただけだった。

夜になると町からひとの姿が消えてしまった。戦場のように陰惨な静けさがあたりを支配した。ラップの音と太鼓の響きだけが続いていた。リズムに乗った征服者たちの足音に勝利の雄叫びがまじった。ファシストの勝利を国家の武装勢力が合法的なものとしたことを、王国警備隊の馬のひずめの音が町中に知らせていた。わたしは病院でその音をはっきりと聞いた。鳴きわめくカラスに先導されて馬を駆る亡霊たちの黒い無気味な姿が、わたしの想像の中に現れた。熱は四〇度まであがった。

わたしの人生の中であれほど不安なときを経験したことはなかった。わたしは戦争のすべての期間にわたって従軍し、多くの戦闘に参加した。そして精神が理性と狂気の狭間でゆれ動く瞬間も経験していた。だが、対立がその場を支配していたわけではない。悲劇はしばしば争うことではなく、争えないことにあるのだ。わたしの友人が死の間際に言おうとしたこともおそらくこのことだろう。

夜も更けていくとファシストたちも疲れてきた。その目的のためにきちんと設営された公立学校に全員がおさまった。県庁から提供されたぶどう酒とリキュールがたっぷり振る舞われ、戦士たちの一日の疲れをいやした。戦士の野営地でのように太鼓のリズムに合わせて歌やダンスが陽気に行われた。その夜はぶどう酒と眠気が盛んな意気を消し去るまで勝利者たちの歓声が続いた。二つの女性ファシスト行動隊も戦友たちとぶどう酒や歌、ダンス、眠りをともにすることを辞さなかった。

その同じ日の午後三時四五分にムッソリーニは上院で厳かにこう語った。「わたしには法の規範を犯す意図はない。憲法を無視する意図もない。国民的規範が言葉だけではないということ、法律が折れた武器ではないということをも明らかにしたいだけである。」

翌朝ファシストたちはカリアリから離れた。駅ではカラビニエーレの軍楽隊が彼らを見送って王家の行進曲を演奏した。その日の朝のファシスト紙は第一面の一番上に巨大な活字で「勝利！ 勝利！ 勝利！」と掲げた。その下には破天荒な企ての報告が続いていた。しかし、公的にはキウルコ教授の著書『ファシスト革命の歴史』第五巻の中でこのニュースは次のように簡潔に表現されている。

「11月27日。カリアリでファシストのデモンストレーションの際に衝突事件が発生した。数多くの負傷者が出た。」

警察はさらに反対派の逮捕を行った。この日の朝には主要な工業家、農場経営者、商人たちおよび国家公務員がファッショに加盟した。これが最初の合意の兆しだった。

第一三章

二週間後わたしは退院した。エフィジオ・メリスは死んで、彼の葬儀には五万人の人が参列した。わたしの政治的同志たちは、対処不能の現状に何らかの解決策を見出すために、わたしがすぐにもローマに向かうことを求めた。正規の手続きを通じてはまったく出口がないことがわたしにはわかっていた。わたしにはあてにできるものは何もなかったが、それでもローマに赴かねばならなかった。

ローマまでの旅行の最後の行程で、わたしは参謀本部のある高級将校と同じ列車に乗り合わせた。彼は国王の副官のひとりだった。私たちは戦争の前にローマで知り合ったが、当時わたしは学生で彼は下級将校だった。その後戦争のあいだにわたしたちは何度か会う機会があり、カルソ [第一次大戦中のイタリア・オーストリア東部戦線の激戦地] をめぐる二度の戦闘を通じて親しくなった。その当時彼は砲兵隊の大尉でわたしの歩兵部隊とともに行動し、数日間を一緒に過ごした。戦争の思い出はいまだに強烈で、彼はわたしに偶然出会ったことを喜んだ。

わたしたちはすぐに戦争での共通の思い出を語り合った。その種の個人的な回想にありがちなことだが、実際に直面した危険や敵から獲得した武器や捕虜の数を著しく水増しさせる傾向がわれわれにもあった。こうした互いに対する暖かい理解の気持から、戦友同士の気楽な雰囲気は簡単に生まれた。さらに彼は忘れていた数多くの思い出をよみがえらせ、自分でも気づかぬままに砲兵隊の賞賛に値する大胆なエピソードをまったく新しく作り上げてしまった。そしてわたしが興味深くその話を聞いたことをとても喜んだ。わたしたちのそれぞれの立場が当然もたらすはずの冷たい雰囲気がこうして取り除かれた。やがてわたしたちの話題は政治に移っていった。わたしはクィリナーレ宮殿 [当時国王の公的な住居だったローマの宮殿] の活動にこれほど深くかかわっている人物の考えを知りたかった。彼は即座に自分が頑強な反ファシストであると言明し、ムッソリーニについて非常に軽蔑した口調で語った。

「それでも彼は多数を握っている」とわたしは彼の考えを探るために言った。

「それだって連中は後ろから撃たれることになるさ」王の副官はすかさず答えた。

「しかし、そうだとしたらなぜ国王は彼に権力を委ねたのか？」

「オーストリア皇帝がワレンシュタインを信じなかったのと同じくらい、国王陛下はムッソリーニを信じてはいない。国王陛下は実験を望んだだけだ [ワレンシュタインは三〇年戦争の際にオーストリア皇帝フェルディナント二世に仕えて大軍を組織した軍事指導者]。」

「しかし、この高価な実験のために犠牲を払うのはわれわれ、イタリア国民だ。」

「奴らは」王の副官は礼儀正しくわたしをさえぎって言った。「共和制と社会主義を望んでいたのだ。国王陛下が共和主義者で社会主義者になれないことはきみだって認めるだろ

う。」

「その議論は共和主義者と社会主義者が権力の座についていればある程度認めてもいい。しかし、その逆に権力を握っていたのは王政派だったじゃないか。国王が彼らを信頼しないなどということがありうるのか？ なぜ国王は戒厳令に署名しなかったのか？」

「国王陛下はそうした状況に追い込まれたのさ。つまりファクタ内閣の力不足と議会の混乱があった。それに、これは秘密でもないけど、アオスタ公の態度もあった。」

アオスタ公の動静についてわたしは漠然とは知っていたが、細かな部分を知らなかった。

「いったいアオスタ公がどう関係してくるんだ？」わたしは尋ねた。

「アオスタ公はファシストだった。ムッソリーニは〈ローマ進軍〉について彼と合意に達していたんだ。国王は最後の瞬間にそのことを知り、対策を講じる時間がもうなかった。アオスタ公は軍にアピールを出すという脅しをかけていた。そうすると、反乱になって友軍同士の見合いが始まるという脅しをね。」

「アオスタ公はそんなことまでやったのか？」

「それ以上のことまでやってのけたさ。王政を救うことが自分の意図で、そのためには王の退位という代償も払う用意があることを王にわからせた。」

「アオスタ公が軍に呼びかけたら、軍はそれにしたがったと思うかね？」

まったくためらうこともなしに、すぐさま彼は答えた。

「いいや。軍はその司令官、すなわち王だけにしたがう。国王の命令に対して躊躇する将校などひとりもない、とぼくは確信している。」

「アオスタ公はその正反対の実例じゃないか。彼だって将校だろう。予備軍団の司令官のはずだ。」

「アオスタ公は」小声で彼は答えた「野心で頭がおかしくなっていたんだ。第三軍の司令官が彼を有頂天にさせていた [アオスタ公は大戦中に第三軍の司令官をつとめていた]。それを聞いていたおかげで、第三軍は自分の指揮下にあるように考えたらしい。それから彼は反動派である上にフランスの王位請求者と血縁関係にある。つまりローマを教皇に返して、ギーズ公の一族を王位につけようという人物さ [アオスタ公エマヌエーレ・フィリベルト・ディ・サヴォイアの妻はフランスのオルレアン家の出身で、当時オルレアン家はギーズ公の称号とフランスの王位継承権を主張していた]。彼はたんなる公子として生涯を終えることをよしとせず、彼の父親がスペインで失った王位をイタリアで取り戻したがっていた [エマヌエーレ・フィリベルトの父親アメデオ・フェルディナンド・マリーア・ディ・サヴォイアは、1870年にスペイン王への即位を受諾するが、1873年にその王位を放棄した]。」

「そうすると国王は全軍の忠誠をあてにできたわけだね？」

「陛下がそのことを少しでも疑われたはずはないさ。」

「それじゃあ、いったいどうしてアオスタ公のほら話を恐れたのかね？」

「王室とイタリアの国際的な威信を傷つけかねないスキャンダルを避けるためさ。これが表に出たら外国でどんな話が飛び交うことになったと思う？」

「それではこのスキャンダルを抑えるためにイタリア国民はクーデタとファシストの独裁を耐え忍ばねばならなかったのか？」

「イタリア人は彼らにふさわしい政府を持っているのさ。革命を望んでいた連中が合法性

だの憲法の尊重だのを主張しているのはとってもおかしいね。」

わたしは何も言えなかった。

副官は別の話題に移った。しかし、彼の話はいつもムッソリーニに戻っていった。わたしは彼のしつこさにいささか驚いていた。副官が微笑みながら小声でわたしにこういったのは、列車がローマの駅に到着するときだった。

「いったいどうして今まで彼を抹殺しようと考えなかったのだろうか？」

わたしはぼんやりしていたので、無邪気に彼に尋ねた。

「誰を？ 国王を？」

「いや、違うよ！」副官は仰天した様子で言った。「ムッソリーニのことを話していたのさ。」

駅でわたしたちは別れた。この副官にその次に会ったのは三年後、1925年の末のことだった。そのときも偶然出会ったのだが、交わした言葉はごくわずかだった。彼は熱狂的なファシストになっていた。明らかにクィリナーレ宮殿ではめざましい昇進を果たしていた。

首都はこの上ない平静な状態だった。議会は閉鎖されていた。反対諸派の指導者たちは全員が待つ以外に何もできないという意見だった。憲法と国王にのみ信頼を相変わらず寄せていた。ファシズムの安定性に関する意見はさまざまだった。ファシズムの権力が一〇年続くと見る者もいれば、二ヶ月で潰えると見る者もいた。後者の考え方をとる者の方が多かった。何人かの指導者たちと話し合ったが、政治的に有効な結論はそこからは得られたなかった。わたしの最も親しい政治的同志たちはローマにはいなかった。わたしは人民党（カトリック民主派）の指導者のひとりと偶然出会った。彼はファシズムとの闘いを通じてきわめて非妥協的な態度を守り、最も強硬な意見を保持していた。

「外へ出て、空気を吸おうじゃないか」彼は言った。

彼の党が内閣に加わったことで、彼は強く批判されていた。彼はわたしと内密の話をしたかった。わたしたちは散歩しながら、サン・セバスティアーノ門からアッピア街道をカステッリの方に向かった。春のような太陽が輝いていた。

彼は政治状況に対する苦い思いを述べて、ファシストの残酷な復讐の最近のエピソードを語った。そして遠からずカトリック派は政府から出るだろうとわたしに告げた。サン・カリストのカタコンベのあたりまで来ると彼は立ち止まった。

「まゝ見てくれ」彼は言った。カタコンベを指さした。「信仰に対抗する力とはいったい何だろう？ ローマ皇帝たちは過酷な弾圧によって何を得たのだろうか？ 暴力は物を破壊できても魂は破壊できない。魂は壊せないものだ。キリスト教は勝利して、帝国は崩壊した。もし最初の信者たちが武器を手にして自らの身を守ったとしたら、いったいどんなことになっていたと思う？ 強い暴力は弱い暴力に勝つことはできても、精神の集中や頑強さには勝てない。そういったものに対して専政の側には武器はないのだ。」

「しかし、専制が不道德なものであるなら、それと戦うことは義務ではないのか？」

「そうだ、戦うことは義務だ。しかし、他者を傷つけることなしにそうしなくてはならない。つまり同意を拒否することだ。非抵抗は野蛮に対する文明の武器なのだ。」

「日々の暴力に対するきみたちときみたちが代表している大衆の姿勢は、結論としてどのようなものになるのか？」

「まあ見てくれ」と彼はカタコンベを指さした。

チェチリア・メテッラの墓を通り過ぎると、カンパーニャ・ロマーナが目の前に静かに広がっていた。ローマから切り離されたクラウディウス帝の水道の遺跡が谷間につながっていた。それは傷つき敗れた巨人たちの部隊が退却するかのように見えた。

「帝国がどうなったか！……」皮肉を込めて彼は語った。

彼がそう話して腕を水道橋の方に伸ばしていると、黒シャツを着た完全武装の行動隊員を乗せた大きなトラックがすごいスピードでわたしたちに追いついた。この集団を指揮していたファシストのリーダーはわたしたちの前を通り過ぎるときにローマ風の敬礼をしてこう叫んだ。

「帝国のローマは誰のものか？」

「われわれのものだ！」全員が熱狂して答えた。

わたしの同僚は一瞬困惑したかと思うと、敬礼に答えて帽子を持ち上げた。

「なぜ挨拶をするんだ？」わたしは尋ねた。

「本当のところは気がつかないうちにわれわれの中に奴隷根性が生まれているのさ。」

サルデーニャからは反対派に対する当局からの報復措置を伝える電報が次々にわたしのもとに届いていた。イタリア全土で反対運動が巻き起こることを期待する者もまだいたが、状況はほとんど絶望的だった。ローマで反乱について話すことは気違い沙汰だった。わたしは共産党議員にも接近した。ファシストの暴力が反歴史的なものであるという評価で彼らは一致していた。したがってそれに対してもうひとつの反歴史的暴力を対置する必要はなく、歴史的な暴力にとって有利な情勢が生まれるのを待つべきだ、としていた。

わたしに情勢を知らせるためにサルデーニャから急遽派遣された友人は、その報告を次のような言葉で終えた。

「ぼくは屈辱の中で生きていくことはできません。それぐらいなら手首を切ります。」

イタリア全土の状況は非常に深刻で、おそらく手首を切ることしか選択の道はなくなるだろう、とわたしが言うと彼は自殺の決意を突然翻した。

「本当ですか？」彼は答えた。「それでもぼくは誠実でありたい。ぼくのことを最後の転向者と考えて下さい。しかし、いずれぼくもファシズムに移行するような気がします。」

読者も後にわかることだが、彼には預言者の素質があった。

あらゆる地方からローマに奇妙なニュースが届き続けていた。南部では市町村の大多数がファシズムに移行した。故郷を救うために、と彼らはその理由を口にした。政府に反対の立場を守ったコムーネでは、ファシズムに移行した少数派は反対派を追い落とすために同じ理由を口にした。それはコムーネの利益にならない、と。こんなわけで、いったい何が起きているのかを理解するのは容易ではなかった。ときには多数派と少数派の両者ともファシズムに移行し、それでもなお相変わらず激しく争っている場合もあった。互いに日和見主義者、不当利得者などと呼び合い、政治的理想の純粹さを自分たちの所有物として主張した。そして首都に使者や腹心の者を派遣して自分たちの立場や権利を強化、確保しようとした。

流血の争いが頻繁に起こった。というのも、自分たちにしたがう者が多いことやより大きな権威を持つことをそれぞれの党派が他の党派に対して見せつけようとしたからだった。そういう人々は全員が少し前までは自由主義派や民主主義派だった。農民たちは軍事演習の

ように機械的に彼らの転向にしたがったが、それは指揮官たちが争いの中で頭角を現すのに役立った。彼らはあるところではこちら側につけば、別の場所ではあちら側についた。多くのコムーネでは、ある党派がファシストになれば、別の党派はナショナリストについた。それは政府の不興を買わずに地域的な争いを公然と継続するためだった。

ファシストとナショナリストは全く同一のものだったが、前者は黒シャツを、後者は青いシャツを着用していた。ファシストはムッソリーニに直属であったが、ナショナリストは植民地大臣フェデルゾーニにしたがっており、フェデルゾーニはムッソリーニの部下だった。ローマで起きたさまざまな事件の影響から、ひとりの人間が一週間のうちに何度も違うシャツに着替えることがよく起きた。

北部では事情は少し異なっていた。工場主や大地主たちはほとんどがファシズムに加わっていた。労働者と農民は敵対的なままだった。しかし、ここでも労働者や農民の組織が破壊と略奪を免れようとして黒シャツを着用し、昔の旗をファッショ支部に委ねることも珍しくなかった。

サルデーニャでもこの時期にファシストの大がかりな遠征が行われた。このときの目標はテッラノーヴァだった。この土地のふたりの友人がローマに来て、そこで起きたことをわたしに教えてくれた。

第一四章

テッラノーヴァはサルデーニャ島の北東岸に位置し、チヴィタヴェッキアに、すなわちイタリア半島に最も近い小さな町だった。住民はファシズムに反対しており、例外は数人の商人たちだけだった。この連中がチヴィタヴェッキアのファシストたちと連絡をとり、武装遠征をもくろんだ。

200人のファシストが小銃や手榴弾、機関銃で武装してチヴィタヴェッキアから出発した。彼らは担架も四つ持参した。日が落ちるとすぐにテッラノーヴァ行きの郵便船に乗り込む形で出発は突然行われ、それを知っていたのは治安当局だけだった。作戦は奇襲でなくてはいけなかった。

テッラノーヴァの数人のファシストが先導役をつとめた。

翌日の夜明けに船はテッラノーヴァに到着した。町の中で手榴弾が爆発し、機関銃の銃声が轟いたとき、何も知らない住民たちはまだ眠っていた。小隊に分かれたファシストたちは反ファシストのリーダーの家々を取り囲み、ドアを打ち壊して侵入した。

王国警備隊とカラビニエーレは事前に知らされていて、受けていた命令通り兵舎から外へ出なかった。

30名ほどの反対派の人々は、まだベッドにいたところを襲撃され、縛り上げられて外へ引きずり出された。窓や屋根から家の外に逃げ出すことができた者たちは、農村へ逃げ込んだ。太陽の光はまだそれほど明るくなく、ファシストたちも計画通りに町から外へ出る道路をすべて封鎖することはできなかった。まだ暗い街路で小銃を発射する音や手榴弾の爆発音が逃げる人々のまわりで響きわたった。

わたしの友人である医師の家では、ファシストたちは窓からも攻撃をかけた。しかし、彼

はたまたま留守だった。家には寝たきりの年老いた母親だけがいた。哀れな老婦人はこうした恐怖に襲われて気が狂ってしまった。

労働者の組織、サークル、復員兵や戦傷者組織の支部はすべて略奪の対象となった。引きずりおろされた旗は戦利品となった。

日が昇るころには町は占領されていた。見事に保たれた秘密の行動が勝利をもたらした。捕らえられた反対派の人々は町の中央広場につれてこられた。そのほとんどはかつての戦争に従軍した経験を持っていた。大半は家から引きずり出されたときと同じ下着姿で裸足のままだった。彼らはファシスト行動隊員に挟まれて一列に並ばされていた。ファシストたちは肩にかついだ小銃に銃剣を装着して、あたかも戦時に捕虜を護送するかのようだった。

全体集会は中央広場で行われた。そこに全員が集まった。最前列には土地のファシストたちが陣取った。そしてすぐに当時流行していた儀式のやり方にしたがって「愛国的洗礼」が始まった。

これは北中部イタリアのファシストたちが作り上げ、かなり以前から実践していた儀式だった。「洗礼」では聖水のかわりにもっぱらヒマシ油が用いられ、改宗者はそれを優しくあるいは力づくでも飲まねばならなかった。トリノ、ミラノ、フィレンツェ、ボローニャなどでは多くの者たちが一リットルものヒマシ油を飲むことを強制された。この頃になると「洗礼」はより神聖な性格を帯びるものとなっていた。カトリックの考え方では人は聖別された水によって原罪から救われるように、反ファシストも、ファシズムの教えにしたがえば、ヒマシ油によって反ファシズムの罪、つまり祖国への反逆の罪から救われる、とされた。

改宗者が最初の命令にしたがってあれこれいわずに飲めば、儀式はすばやく進行した。抵抗を示した場合には手続きは複雑になった。そのせいで殺された反ファシストもいた。自らの救済に抵抗するような人間は、生きていたよりも死んだほうが大義と祖国のためには役に立つ、というのだ。

ローマではこうした犠牲者が数多かった。だがほとんどのケースではこうした極端な結果になることはなかった。反逆者は押さえつけられて口を開けさせられたが、それには古参の行動隊員が考案して特許をとった特別な仕掛けが用いられた。フィレンツェの「行動隊」はそのことで有名になった。

執拗に抵抗する者には、病院でのように探針が使われた。不信心者の抵抗の度合いと不信心の程度に応じて、処方するヒマシ油の量が細かく決められていた。複合的なケースでは、ヒマシ油に灯油あるいはガソリンを加えることもあり、ヨード・チンキを混ぜることもあった。そんな扱いを受けたあとでひどい病気になったり、死ぬことすらまれではなかった。決まりでは男性に限定されていたこの種の儀式であったが、実際には女性もその対象に含まれた。

二度にわたり神聖なる都市となったローマですら、この種の女性の洗礼を目撃している。

サルデーニャではそれまでこうしたやり方での洗礼を受けた者はいなかった。したがって、これが新しいシステムの始まりだった。サルデーニャ島は全国的な文明の発展にいつも遅れてついていったのだ。

土地の薬局には十分なだけのヒマシ油のストックがないことを賢明にも予測したファシストたちは、相当な量を持参していた。兵站の面から見て準備は完璧だった。遠征には従軍司

祭すら欠けていなかった。それは従軍経験を持つ修道士だった。彼は武器を持っていなかった。ピストルの代わりに十字架を持ち、腕には赤十字をつけていた。

儀式は太鼓を打つ音で開始された。

遠征隊指揮官が短い演説を行った。そのあとで、最初の捕虜の額にピストルを押しあてながら次のような聖なる一文を唱えた。「祖国の名のもとにこれを飲むことを命じる！」

ひとりまたひとりと、ある者はいやいやながら、ある者は涼しい顔で、全員が飲んだ。たったひとり、復員兵の農民だけが飲むのを拒否した。彼のはっきりした拒否は指揮官を驚かせ、指揮官は説明を求めた。しかし農夫は抵抗の決意にすべての意志の力を集中させており、何も語らなかった。ピストルでの脅迫も何の効果もなかった。ファシストたちは威信を傷つけられたと感じて、その場での処刑を主張した。

「裏切り者には死を！」と群集は叫んだ。

広場の女たちは恐怖に駆られて泣き叫んだ。

「静かに！」指揮官は叫んで、太鼓を打つように指示した。

指揮官は太鼓の連打を止めさせると、最後に重々しく、ヒマシ油を飲むように命令を繰り返した。農夫はもう我慢できなかった。指揮官の顔をにらみつけながら、ある言葉を彼に向かって叫んだ。それは慎みを旨とする清教徒の辞書の中には含まれない言葉だった。そしてそれ以外には一言もつけ加えなかった。しかしそれだけで十分だった。洗礼の神聖さは汚されてしまった。

指揮官は血の気の多い人物だった。

「頭に一発強烈なのをくれてやれ！」と副官に命じた。

副官はものすごい大男で、記章や肩章をたくさん身につけていた。

すばやく棍棒を両手で握ると冒瀆者の頭に振りおろした。農夫は気を失って崩れ落ちた。指揮官は担架兵を呼び、農夫の自宅へ連れて行くよう命じた。

儀式は終わりのように見えた。

捕らえられた者たちの中に反ファシズム運動の有力なリーダーのひとりである社会民主主義派の弁護士がいた。大人数の家族についての心配や生きたいという自然な欲求はその朝彼を屈伏に導いたが、それは決して英雄的とはいえない行為だった。彼もヒマシ油を飲んだが、それも彼の重要な地位を反映して他人の倍である半リットルにも及んだ。ベッドにいたところを急襲され、半裸のままだった彼は他の人々よりも寒さに苦しんでいた。ストイックに目を閉じたまま我慢をして彼は飲んだ。その理由のひとつには、侵入者たちが満足すれば家に帰してもらえるかもしれないと期待していたことがあった。彼は自分が計画の主たる目標であることを知らなかった。だが、すぐにそのことを彼は理解した。洗礼が終わると指揮官は広場の中央に大きなテーブルを設置させた。そして弁護士にテーブルに乗ってムッソリーニをたたえる演説を行うように促した。当然のことながら、普通の弁護士にとっては自分が感じているのと反対の考え方を口にするのは困難でもつらくもないことだろう。しかし、この弁護士はヒマシ油を飲んだとしても自分が変わっていないことを威厳をもって示した。彼は落ち着いて自分はしゃべらないと答えた。

「冗談はやめてくれ」指揮官は言い返した。「あんたは今までの生涯を嘘っぱちばかりしゃべってきたじゃないか。そのあんたが真実の言葉を語らねばならないなんて今になって言

「いたいのかね？」

そして指揮官は彼に軽く二発棍棒をお見舞いするように副官に命じた。哀れな男は一言も口にしなかった。

こうしたやりとりが続いている間に弁護士の二人の娘がやって来た。ひとはまだ幼児でもうひとは十五歳だった。弁護士の家の女性たちは、彼がどこへ連れて行かれたかがわからなかったのので、町中を手分けして探していたのだった。そしてこの二人の娘が最初に彼を見つけ出した。娘たちはファシストの隊列をすり抜けて、父親のところに駆け寄るとひざまずいて彼の腕の中に飛び込んだ。父娘の再会も指揮官の心を動かすことはなかった。尊敬に値する戦士は、力を前にしても涙を前にしても、狼狽してはならないということだった。二人の娘をその場から遠ざけるように指示して、弁護士に対して丁重に話すようにあらためて促した。弁護士は再び拒否し、もう一度副官の棍棒が振りおろされた。このときも老人は一言も泣き言を言わなかった。娘たちは群衆の間で叫んだ。「お父さんを殺さないで！ お父さんを殺さないで！」

指揮官はさらにもう一度発言を促し、弁護士は再び拒否した。だが今回は副官が手慣れた棍棒を振りおろす前に、二人の娘がまたファシストの隊列をすり抜けて指揮官のところまでたどり着くことができた。他のファシストたちも彼女たちにはあえて暴力をふるおうとしなかったからだ。

「お父さんを殺さないで」娘たちは泣きながら懇願した。

「じゃあ、しゃべるんだ！」指揮官は顔を真っ赤にして叫んだ。「この罪のない二人の子どもを泣かせないためにも。」

感動が父親をとらえ始め、それまでとは反対の方向に向けさせた。娘たちも父親がしゃべることで助かることを理解して、彼に懇願した。

「お父さん話して！ お願いだから話して！」

棍棒にできなかったことを娘たちの涙がなし得たのだ。弁護士は話すことを決意して、テーブルの上に登った。勝利の雄叫びがファシストたちの間からあがったが、それは敵の塹壕を征服した兵士たちのようだった。彼らが勝ったのだ。弁護士は話した。

「ムッソリーニの善政は……」彼は話し始めた。

「まず最初に民主制の罪業^{デモクラチア}についてしゃべるんだ」指揮官は興奮して言葉をさえぎった。弁護士はその罪業について語った。

「奴らが祖国を裏切ったと言うんだ。」

弁護士はそう言った。

ファシストたちは非常に喜んだ。嵐のような笑い声と侮蔑の叫びがセンテンスごとに湧き起こった。しかし全体をよく見ていた指揮官は、もっと激しい行動に出ることを許さなかった。

「それでは、ムッソリーニをたたえよ」指揮官は命じた。

弁護士はムッソリーニをほめたたえた。みんなが笑った。

そのとき予期せぬことが起こった。青ざめた弁護士はよろめきながら身を折って、か細い声で指揮官に向かって叫んだ。

「ならず者！」

そしてテーブルの下に転げ落ちたが、それはまるで死体のようだった。

彼は死んでしまったと最初は誰もが思った。だが医師の代わりも務めていた従軍司祭が、それはたんなる気絶だと確かめた。脈拍は乱れていたが、命に別状はなかった。指揮官は担架兵に彼を家に連れ帰るように命じた。弁護士は娘たちに付き添われて姿を消した。

捕虜たちは釈放された。ファシストの部隊は再編成され、軍旗を先頭に担架をしんがりにして縦隊は棧橋に向かって歩き始めた。勝利の歌は空に響いた。

ジョヴィネツァ・ジョヴィネツァ
若 さ よ 若 さ !

プリマヴェーラ・ディ・ベッレツァ
美 し き 春 よ

.....

我らが自由のために！ [ファシストの歌『ジョヴィネツァ』]

住民はファシストたちが出発するまで家に鍵を掛けて閉じこもった。その頃になってようやくカラビニエーレと王国警備兵たちが兵舎から出てきて、治安を保つためにパトロールを始めた。列車は時間通りに発車し、船もいつもの時間に出港した。

船が波止場を離れるときファシストたちの全員がブリッジに整列していた。

「サルデーニャは誰のものか？」指揮官が叫んだ。

「われわれのものだ！」声を合わせて答えた。

この領土の獲得を祝うために機関銃が発射され手榴弾が投げられた。

今となってはローマでわたしのできることが何かあるだろうか？ いったいそれまでに何ができたのだろうか？ 話を聞いたその日にわたしはサルデーニャに戻ることにした。だがその前に警視總監と会談したいと思った。当時その職にあったのは、終戦時に軍団長で「ローマ進軍」の際の四天王のひとりだったデ・ポーノ将軍だった。わたしは彼とは1915年11月にカルソで個人的な面識を得ていた。その頃彼は第一臨時狙撃大隊を指揮していた。わたしたちの連隊は彼の連隊に代わって配置についたが、それは彼が奪取不能と判断していた敵の陣地に対する攻撃の直前だった。彼自身がそこを攻撃して成果を得られず、大きな損害を受けていた。交代の際にかれはこう言った。

「われわれの目の前の陣地を新しい部隊の兵士たちが攻略したとしたら、我が輩は大佐の職を辞して、彼らの部隊の伍長の袖章をつけてみせる。」

そのとき以来彼とは会うことはなかった。わたしたちの部隊は一連のきわめて凄惨な戦闘の後に敵の陣地を獲得することに成功した。この戦闘については最高司令部も記録にとどめている。

あれから七年後の今、わたしは彼と再び会った。だが今回は陣地を攻略したのは彼の方で、わたしはそれを失う側だった。

将軍は私を冷たく迎えた。わたしはすぐにカルソでの出会いを、私は中尉で彼が大佐だったこと、彼が行った約束のことなどを思い出させた。わたしはテッラノーヴァへのファシストの遠征について知っていることをすべて彼に語った。わたしはこんな風に言った。彼の命

令によって、自分たちの家で襲撃を受け、縛り上げられて暴行を受けた人々こそ、彼が喜んで伍長として仕えることを表明した部隊の兵士たちなのだ、と。

将軍たちの中には特別な感受性の持ち主がいることにわたしはそれまでに何度も気づいていた。10個連隊の全滅を目の前にしても冷静に動揺を示さない将軍がいた。ところが同じ人物がそのことをちょっとした文学的表現で聞くと、涙を流さんばかりに感動を示すのだ。デ・ポーノ将軍はハンカチを目に押しあてた。彼は泣いていた。わたしは驚いてしまった。それが演技だとはまったく思えなかった。わたしの目の前でいったいどういう目的で？ 魂の中には探索し得ない深淵が存在するのだ。1924年に彼はまったく同じように側近を前にして泣くことになる。それはマッテオッティ事件について話しているときに、世論もファシストたちさえも大半が事件が彼の責任に帰するものとしているとして、泣いたのだ。

将軍は自制心を取り戻した。

「兵士としてのわたしの名誉にかけて、かくの如き恥ずべき行為が決して繰り返されることがないとあなたに明言する」と断固とした口調で彼は言った。

「しかしそれよりひどいことがもう起きています」と私はつけ加えた。そして彼にキャリアでの事件を思い出させた。

「ああ、あれには私は関係していない。」

「あなたでなければいったい誰が治安当局にあんなことを命令できるのですか？」

「それは《ドゥーチェ》自身だよ」と不満そうな身振りで将軍は答えた。そしてわたしに打ち明ける調子で語った。

「政治というのは汚い仕事だ。部下の兵士たちといっしょの頃の方がずっと気分が良かった。ところが今ではわたしはこんなひどい状況の中にいるんだ。自由な意志を持つなんて考えることもできない。人生の中ではわれわれとは無関係な事件が何千回と生じて、そしてそういう事件がわれわれの意志を支配することになるのだ。あるやり方で行動するのはそうしたいからではなくて、それ以外にはやりようがないからなのだ。われわれは運命に縛られているのだ……。」

将軍は再び感情の波に押し流されようとしていた。しかしやっとのことで踏みとどまり、言葉を続けた。

「イタリア中でわたしのことをならず者呼ばわりしている。きみがそれを否定する必要はない。」わたしは何も言わなかった。「わたしはよく承知している。だが本当に誠実に答えてくれたまえ。きみはわたしがならず者だと思うかい？」

厳密な答えを避けながら私は答えた。「しかし警察を指揮しているのはあなたでしょう、そうではないんですか？」

「もちろんわたしの指揮下にある。わたしは見かけだけの男ではない。わたしがいなかったら《ローマ進軍》もカーニヴァルになっていただろう。わたしは自分の仕事をよく知っている。ムッソリーニは炊事担当の伍長として軍事技術に精通しているに過ぎない。しかし現在わたしはあるところまでしか自分の指揮下に置いていない。わたしは指揮をするが、またしたがわねばならないのだ。私は本当にゴタゴタに巻き込まれているのだ。」

「ご自分の自由を取り戻したらいかがですか」わたしは提案した。

「不可能だ。だがわたしはきみに誓って言うが、これから先は法の秩序を再建するために

全精力を費やすつもりだ。」

將軍は法を順守させようという突然の異常な熱意に突き動かされているように本当に見えた。わたしの目の前で書記をひとり呼んでサルデーニャに電報で命令を送るように指示した。それはファシストのあらゆる非合法行為を精力的に抑えるように命じていた。

彼は書記に向かって叫んだ。「復員兵士たちは、いかなる党派に属していようとも、イタリアの第一級市民と見なされるべきである。」ここでわたしの方を見てつけ加えた。「そして復員兵士だけではない。すべての人はイタリア市民である。今後はすべての者が法の前では平等でなくてはならない。わたしは断固たる決意で対処するつもりである。首相がわたしにしたがってこの路線をとらなければ、イタリア中でわたしのことが話題になることだろう。」

將軍はしばらく考え込んでじっとしていたが、さらにつけ加えた。

「そしておそらくヨーロッパ中で話題になるだろう。」

わたしたちの会話はかなり長く続いた。將軍は階段のところまで私を送った。階段を降りるわたしの耳には彼の声はまだ聞こえていた。手すりの上に身を乗り出してわたしにこう言っていた。

「これはデ・ポーノ將軍の言葉ですぞ！」

自分の胸をたたいている彼の姿が見えた。

その夜、出発前にトリノの代議士が12月18日から19日の夜に彼の町で起きた虐殺事件をわたしに伝えた。21人の労働者がファシストたちによって就寝中のところを襲われ、トラックで市外に運ばれて夜明けに銃殺されたのだ。警察当局と司法当局は介入しなかった。数日後トリノのファシストの指導者だったブランディマルテ執政官は新聞のインタビューに答えてこう説明した。「反対派に対する手厳しい教訓を与えるためにやらねばならなかったのだ。」

第一五章

クリスマスまであと数日だった。わたしはいつものように田舎の母の家で祭日を過ごすつもりだった。サルデーニャのクリスマスは何世紀にもわたる伝統によって変化を蒙らない原始的な形態で祝われる。両親の家に子どもが全員集まり、その大きな暖炉のまわりで家族の結束を祝うのだ。この祝祭のために内戦状態は停止されるとわたしは確信していた。あの戦争の間ですらすべての戦線の塹壕でクリスマスは尊重されたのではなかったか？

だが戦争と比べて内戦に足りないものは大口徑の重火器だけだった。

テッラノーヴァから島に入るとすぐにいつもとは違う動きにわたしは気づいた。自分が警察によって監視されていることに気がつくのはたやすかった。明らかにわたしの到着が島に伝えられていた。警視總監の電報は本当に発信されていた。島に上陸して数分後にはひとりの警視正がわたしのところにやって来てクリスマスの挨拶を述べた。

彼はこう言った。「テッラノーヴァにとどまってはならない、とあなたに通告するようにわたしは上部から命令を受けました。というより、立ち去ることもとどまることもあなたは自由です。しかしあなたがここにとどまれば、テッラノーヴァの反対派のリーダー全員を逮捕するように命令を受けております。」

そしてテッラノーヴァにはカラビニエーレと王国警備隊の増派が行われたことをわたしに

説明した。

わたしは彼に対して、そのような行動は国会議員の自由を間接的に制限するものであることを伝えた。だが警視正は憲法上の良心の呵責をまったく感じていなかった。そこにわたしの友人がやって来て、町は戒厳令の状態にあると伝えた。この友人もわたしが町を離れることを求めた。彼の話し方からわたしは町が恐慌状態にあることを理解した。

わたしはすぐにテッラノーヴァを離れ、その近くの地域の政治的同志たちと話し合った。彼らは最近起こったさまざまな事件についてわたしに教えてくれた。大陸からは軍の部隊が続々と送り込まれていた。砲兵二個連隊の駐留の準備が進められていた。新政府はこうしてサルデーニャ島における自らの権威の強化をはかっていた。

絶望的な決意を伝える者もいた。

「ぼくは家にバリケードを作る」ある弁護士はこう言っていた。「弾丸の最後の一発まで自分の身を守るつもりだ。有刺鉄線まで用意しているんだ。ファシストどもよ来るなら来い！ ぼくを捕らえようというのなら大砲を使わなきゃならんだらう。」

読者がこのように錯綜した混乱の事態に関心を抱いておられるならば、後述するように、この大胆な法律家が襲撃者たちに対して激烈に抵抗した戦闘の場面に立ち会うことになるだろう。しかしその時点までは流血は見えていなかったとっておくのが適当だろう。

そしてわたしはキャリア行きの列車に乗った。母を訪れる前に少なくとも一日はキャリアにとどまるつもりだった。

キャリアまでの途中の小さな駅で、わたしの党派の若者のひとりがコンパートメントに入ってきた。彼は非常に動揺していた。彼はわたしがキャリアまで行くべきではないとせっかちな口調で言った。そして同志たちが選んだある駅で下車すべきだとも言った。そこではみんなが私を待っていて、あらゆることに関する情報を教えてくれることになっているという話だった。キャリアはその前日に軍事的に占領されていた。前回を上回る兵力が動員され、11月27日と同じような攻撃が繰り返されていた。あらゆる組織の拠点と新聞社が攻撃を受けていた。わたしの自宅も侵入を受け、わたしの写真がファシストたちの小銃の目標にされていた。ファシストたちはわたしを葬り去ろうと駅で待ち構えていた。どのような形であれ、わたしはキャリアに入るべきではない、なぜならわたしを守る者はひとりもないし、確実にわたしは護衛もないままに殺されるだろう、ということだった。わたしの同志たちは既に逮捕されていた。数人だけが何とか逮捕を免れ、彼らが途中の駅の間で連絡組織を作っていた。これが短時間で作ることが可能だった唯一の組織で、彼らも今となっては救えるものは生命しかないことを確信していた。

わたしたちは指定された駅で列車を降りた。同志たちの一団が心配そうにわたしを待っていた。

もはや疑いの余地はなかった。すべての国家組織がファシズムに服従しているのだ。今ではファシズムに反対する民主的運動の中心だったサルデーニャ島の州都キャリアもファシストたちの手中にあった。次の日に島の中部にあるヌオーロの町でわたしたちは反ファシズム運動の有力なリーダーたちを結集して会議を開いた。われわれの側から攻撃をかけることは不可能だった。大規模な形での組織的防衛策も、警察が当初から抑圧していたために、不可能だった。財産と生命を守るための個人的な抵抗しか残されていなかった。

ヌオーロでは強い脅迫を受けていた反対派の人々が武装して自分たちの家の防衛を準備していた。わたしはクリスマスの夜に母の家に着くように、海岸線に沿って島内を移動した。夜になる前には確実に着くと電報を送っておいた。

早く着くためには本来ならキャリアを通過しなくてはいけなかった。だがキャリアを通ることができないために、遠回りの道をとってセノルビの駅で下車した。友人を訪ねて数時間とどまり、そこからは自動車で行くつもりだった。その日は12月24日だった。

セノルビは農村地帯の小さな町だった。その大半が農民である町の住民はそれまでファシズムに反対の立場をとっていた。わたしの友人は反対派のリーダーだった。彼は大学の学友でもあり、戦友でもあった。わたしたちは相互に強い友情で結ばれていた。彼の家を訪ねると、父と妹が一緒にいた。二人の弟は外出中だった。彼らは全員がクリスマスをと共に過ごすために別々の場所から集まってきていた。町が大混乱の状態にあることにわたしはすぐに気がついた。というのも、キャリアからやってきた連中とその親戚である何人かの土地の地主たちによって、ちょうどその頃正規のファシスト組織が生まれていたからだ。

話している間に二人の弟が返ってきた。弟のうちのひとりはまだ学生であり、もうひとり
は戦傷者だった。空軍の将校だった彼は空中戦で負傷していた。敵地に墜落して助かったのはまったくの幸運だった。彼は戦闘的な反ファシストだった。彼が言うには、わたしの電報は途中で傍受され、土地のファシストたちがその内容を知っているということだった。わたしが町に
いることを知っていて、攻撃を加えようという意図を抱いて町の中央広場に集まり始めているという話だった。

すぐさま出発すればあわただしい逃亡のように見えかねなかったもので、わたしはとどまることにした。だが待ったことは無分別だった。というのもファシストたちに集合し近隣から他のファシスト行動隊が到着するだけの時間を与えかねなかったからだ。広場からは叫び声
が聞こえてきた。そこで何が起きているのかを知るために友人のひとりが外に出た。彼は
気を揉みながらすぐに家に戻った。ファシストたちは家を包囲して、わたしを捕まえようと
叫んでいた。

彼が話し終える前に玄関の大きなドアに二回ノックの音が響いた。家族のひとりがドアを開けた。ひとりのファシストが現れた。黒シャツを着てピストルとナイフで武装していた。命令口調の
高い声で彼は言った。

「五分間の猶予を与える。その間にルッス代議士をわれわれに引き渡すように。さもなければわれわれがこの家を襲撃する。」

「無法者^{バンディット}が！」彼に向かってこの家の主人が最高の侮蔑を込めて叫んだ。

ファシストは姿を消した。ドアは閉じられた。

わたしは自分が意図せずにこの家に迷惑をもたらしてしまったことを詫びて、外へ出ようと立上がった。しかしわたしを激しく止めようとする家人の意志は真剣だった。わたしは彼の何よりもこの家の娘がそこにいることが気がかかっていた。彼女は血も凍るほどの突然の悪寒に震えていた。だがどれほど動揺していたとしても、彼女には細い声で家族にこう言うだけの力が残っていた。

「お客様を引き渡すような屈辱に立ち会うくらいなら、殺された方がましです。」

わたしはなおも外へ出ると主張した。だが父親は家長の権威を示しながら、厳しい口調で

言った。

「どうかわたしを名誉を重んずる人間であると考えていただきたい。あなたは外へ出てはいけない。わたしは自分の家族にそのような不名誉な行為を決して許しはしない。この家にもどのような攻撃がかけられたとしても。わたしたちは自らの身を守ります。」

そして彼は武器を持ってこさせた。小銃が二丁と猟銃が四丁あった。もうそれ以上わたしは強く言えなかった。戦争を戦った経験のある農夫のひとりも、家に小銃が一丁あると言いつ張った。われわれの側には六人の男がいて、そのうちの四人は復員兵だった。あらゆる戦術を利用した戦闘が可能と思えた。

元飛行士は待ちくたびれてものすごい大声で叫んだ。

「五分間とはとくに過ぎたぞ。それ入ってこい！ どんどんやって来い！ 最初に入ってきた者には千リラの賞金だぞ。」

ファシストたちはこの声を聞き、侮辱的な叫び声で応えた。家は完全に包囲されていたが、彼らは入ってこようとはしなかった。わたしに向かって「殺してやる」という叫び声が放たれた。家の外では、玄関のドアに向かって棍棒や石が投げつけられた。番犬たちの吠える声がやかましく鳴り響いた。

「まるでアビシニアにいるみたい」と兄のかたわらで震えながらうずくまっていた娘がささやいた。彼女はイギリスで学んでいて、アングロ＝サクソン風の教育を受けていた。

「卑怯者め！」と外からファシストの叫び声が聞こえてきた。「勇気があるなら出てこい！」

こうした状況が長く続いた。私は外に出ず、ファシストたちも中には入ってこなかった。わめき声は高まるばかりだった。

しかし自分のせいでこの家族が永続的な包囲状態に置かれるのはわたしには耐えられなかった。この家の人々はわたしの辛い気持ちを察してくれて、見られずに外に出ることが可能になる夜まで待つようにわたしに提案した。

そしてこうつけ加えた。「夜になる前にこの町の住民たちが仕事から戻ってくるでしょう。農夫たちがわれわれを解放してくれると思います。」

その場を逃げ出すという考え方はまったく気に入らなかった。それはわたしの子ども時代のある印象のせいだった。カラビニエーレたちに追われて逃げる男を見たことがあるのだ。その場の人々全員がこう叫んでいた。「泥棒だ！」そのとき以来、わたしの心には逃げる人間を泥棒とつなげて考えるようになった……。また、畑から帰ってくる住民たちがこの事態に介入してくることにわたしは期待していなかった。最も勇敢な連中は帰ってくると同時に逮捕されるだろうし、他の人々は指導者を失うことだろうと考えていた。わたしはポケットにピストルを持っていた。友人たちが反対する前にわたしは突然ドアに向かって突進した。ドアを開け、ファシストたちのまっただ中に飛び込んだ。

予想外の事態は舞台でも現実の人生でもつねに成功の要因となる。ファシストたちは黙って入ってわたしをじっと見つめていた。彼らは脅威を感じるよりも驚いていた。

風向きが急に変わった。わたしはファシストたちに何を望むのかと尋ねた。そのときにはわたしをかくまっていた家の人々が全員外に出て、そばに立った。ファシストたちのリーダーは退役将校で、かつてわたしの中隊で下士官をつとめていた人物だった。大尉だった彼の

兄は、わたしの軍隊と学校での同僚だった。わたしは彼の家族をよく知っていた。戦争で彼は抜きこんでた働きを示した。落ち着かない気性の彼は、戦争が終わると、政治闘争で戦いを続けることを望んだ。彼はファシストに転向したばかりだった。彼の姿を見て、わたしは問いかけた。

「この一団を率いているのはきみかね？」

彼は困った様子で答えた。自分は命令を実行する者であることを伝え、わたしが黙っていることを要求した。

明らかに状況は少し前に思えたほどドラマティックではなくなっていた。将校はわたしが「クラブ」に行かねばならず、そこでわたしを待つ人々がいると言った。彼はわたしを先導し、わたしたちは二列に並んだファシストと駆けつけてきた人々の間を歩いた。少しは自分に権威を与えようとして、わたしは査察を行う司令官のような態度をとった。年老いて歯の抜けた黒シャツ姿の農夫がわたしに笑いかけた。そして彼の前を通ると突然表情をくもらせ、ピストルを引き出して叫んだ。

「ルッスに死を！」

将校はすぐに振り向いた。大急ぎでかけ戻ると、叫んだ男の頭に棍棒の一撃を食らわした。「黒シャツ」は気を失ってわたしの足元に倒れた。

「静かに、規律を守れ！」将校は訓告を与えた。

「ルッス万歳！」明らかに状況をまだよく理解していない男が叫んだ。

「ルッス万歳！」群集の中からの唱和する声とわたしについてきた家族たちが叫んだ。

《ひとつの党派ができつつあるようだ》とわたしは考えた。

わたしたちのまわりには大勢の人々が新たに集まってきていた。その中にわたしの大隊のかつての兵士たちの姿を何人も見つけた。

「クラブ」は近かった。わたしたちはそこに数分で着いた。将校は姿を消し、わたしはファシストたちの真ん中にとり残された。何が起こるか待ちながら、わたしは身近にいた連中と話し始めた。彼らはこの町の農夫たちだった。

「きみたちは何を望んでいるのか？」私は尋ねた。

「われわれはニースとサヴォイアとダルマツィアの獲得を要求している。戦争に勝利しながら、詐欺にあったようなものだ。」若者のひとりが答えた。

領土問題に関する議論を始めるには時期が悪いとわたしは判断した。

「じゃあそれらの土地をとればいいじゃないか。わたしはその邪魔はしない。」わたしは応えた。

「俺たちは水道が欲しいんだ」その場でもっとも年老いた男が言った。彼の言うことがよくわからなかったため、この町には水源が不足していて五〇年来水道を待ち望んでいることを教えてくれた。

彼はこう言った。「水道敷設の約束があったのは俺がまだ子どもの頃だった。俺の髪の毛は真っ白になったが、まだ水道は来ない。」そしてわたしに対する憤懣は水道に原因があると説明してくれた。わたしが水道に反対しているとファシストの指導者たちは彼らに話したのだ。

わたしは自分が酒を飲まないこと、したがってワインよりも水が好きなのをわからせた。

わたしが水道に反対するような理由はこの世にただのひとつもありえないことも伝えた。もし水道敷設事業がわたしの管轄下にあるものならば、誰もがアヒルのように水浴びしながら暮らせるようになっていただろうということもわからせた。何人かが笑い声をあげた。これに勇気づけられてさらに言葉を続けた。

「そしてこれが理由できみたちは私を殺そうと言うのかね？ 代議士を殺せば水道が町に来ると考えているのかね？ この行為は水よりも血を求めているように私には思えるのだが。」

今やもっと離れた場所にいる連中もわたしの言葉に耳を傾け始めた。そのまわりには和やかな雰囲気が生み出された。ある男はアジアゴ高原で二度の突撃にわたしとともに参加したことを持ち出した。

将校がその場に割って入り、彼についてサロンへ来るように言った。わたしは彼にしたがい、一緒に中に入った。

部屋の中央の丸いテーブルの近くにひとりの初老の紳士がいた。それがこの町の公証人であることにすぐ気づいた。彼は帽子を被ったまま腰掛けており、鞆と書類を目の前に広げていた。わたしに遺言を残させるつもりなのか、と一瞬考えた。

「起立！」将校が命令した。

全員が立上がった。将校の合図で公証人は帽子を脱ぎ、一枚の公文書用紙を取り上げると、わたしに向かってそれを示した。

「どうかご署名をお願いします」礼儀正しく言った。

わたしはその文書をざっと眺めた。それは公証人文書だった。こんな風に始まっていた。「国王陛下ヴィットーリオ・エマヌエーレ三世、神の恩寵ならびに国民の意志などなどの名において……」それに続いてすぐに、自分の政治的過去を否定してファシズムがイタリアを救う唯一の党派であることを認める宣言があった。そして最後は「以上に関して承認し、署名するものである。」わたしはそれに署名をすべきというのである。

「この文書を作成されたのはあなたですか？」私は公証人に尋ねた。

「わたしの信念にかけて、そのとおりです」彼は答えた。相変わらず丁寧な口調だった。

「これはわたしとは関係のない文書です」とわたしは将校に言った。そして書類を公証人に返した。しかし将校は同じ意見ではなかった。

「署名したくないというのか！」彼は叫ぶと部下の方を向いた。「ファシストたちよ！」

「われらこそ！」ファシストたちは応えて、棍棒やピストルを掲げた。

状況はまた難しいものになってきた。その場にいる人々はまた興奮し始めた。わたしはその少し前に獲得していた有利な雰囲気を失ってしまった。わたしに対して彼らは再び脅迫するような態度をとり始めた。ふたりの男がわたしの胸にピストルを突きつけた。わたしは武器を持っていたが、こんな状況でピストルが一丁あっても何の役に立ただろう？ 時間を稼いで聴衆を再び得るために話をしようと試みた。だがわたしが何か言おうとする度に威嚇の叫びがあがるのだった。

〈そうだあの水道のことがある！〉わたしは考えた。

「奴にしゃべらせろ」あるバリトンの声があった。全員が黙った。わたしはそのときを利用して復員兵士の一団に向かって話した。

「きみたちがやりたいことは暗殺なのだから、弾丸の費用を節約した方がよい。ほらここにわたしが戦争中に使っていたピストルがある。きみたちの中でうしろめたく感じない者がいるなら、わたしを撃てばよい。」

誰も動かなかった。彼らの眼差しからわたしは自分はその場の主導権を取り戻したことを理解した。

「結構」私は言った。「それならわたしは外に出させてもらう。」

そばにいたファシストたちが遠ざかり、わたしは外へ出ようとした。だが少し離れたところからなおも叫ぶ声があった。

「殺せ！ 殺してしまえ！」

「救いの神」デウス・エクス・マキナは本にあるような格好をしていなかった。まさにそのときに一台の競争用自動車の爆音がその場にいた人々の注意を引きつけた。自動車が《クラブ》の入り口で急停車し、そこから埃だらけの背の高いやせた若者が降りてきた。それはサルデーニャの戦傷者連盟の代表者だった。

彼はわたしの個人的な友人だった。どこでも邪魔されることなく行けるファシストの通行証を持っていた。わたしを見るとすぐに何が起きているのかを彼は理解した。彼は広間に飛び込んできた。彼は駆け引きの巧みな男だった。

「イタリア万歳！」とまず叫んだ。そしてわたしを抱擁し、ついでファシストの指導者も抱きしめた。そしてよく通る声で大きなしぐさを交えて休みなく、戦争と勝利と英雄と犠牲者について話し続けた。全員がうっとりしながらそれに耳を傾けた。彼は両目で合図を送ってわたしに安心するように伝えた。彼のなすがままだった。戦傷者の代表である彼は、立派な兵士だった。話を続けながら彼はわたしの腕をとり、自動車まで連れて行った。誰もわたしたちを止めようとはしなかった。一瞬のうちにわたしたちは乗り込み、そして自動車は流星のようにその場を離れた。

母の家にはその日の夜遅くに着いた。兄が出迎えてくれ、わたしは何が起きたかを知らせた。母は心配しながらわたしを待っていた。わたしに何か悪いことが起きるのを恐れていたのだ。感激に震えながら母はわたしを抱きしめ、クリスマスの夜の伝統的な決まり文句で挨拶をした。

「平和を！ イエス・キリストは地上に降りられた。」

わたしはまだ公証人のことを考えていて、その挨拶に応えるのを忘れていた。母は驚きながら待っていた。兄はふたりを抱きしめて、わたしの代わりに応えてくれた。

「平和を！ イエス・キリストは地上に降りられた。」